

第一次メッセニア戦争後のスパルタと戦争

清 永 昭 次

序 言

古代ギリシア史の研究者は、そのどの部分を研究対象に選んでも、明確な結論が得られにくいことにいらだちを覚えさせられるが、古典期以前のスパルタ史は、再構成がとくに困難なテーマの一つであろう。筆者は従来、内外の諸先学の研究に導かれ、乏しい史料を探りながら、スパルタの政治史的発展を自分なりに順を追って辿ってきた。そして、スパルタ・ポリスは前九世紀末に貴族政をもつて成立したこと⁽¹⁾、前八世紀後半の第一次メッセニア戦争期に、王、平民の双方から一時的な反抗が起ったが、貴族は容易にそれを克服して強力な貴族政を維持したこと⁽²⁾、前八世紀末のタラスへの植民のころにも、貴族支配に対して平民はとくに不満を持っていなかったこと⁽³⁾、などを指摘してきた。引続いて筆者は、前七世紀以降のスパルタ政治史の研究に着手したが、その研究の過程において、当時のスパルタが携わった戦争が、その政治的発展にとって規定的な枠組みをなしたことを痛感するようになった⁽⁴⁾。もとよりおよそポリスの政治は、本質的に、そのポリス内部の諸身分、諸階級、諸党派それぞれの運動の、またそ

これらの運動相互の複雑な関係の、総和として展開するのであるが、そうしたポリスの内的発展にたいして、外的要因、とくに戦争が大きな影響を及ぼすことも疑問の余地がないのである。⁽⁵⁾ しかしまた第一次メッセニア戦争後のスパルタの場合には、それが関係した戦争についての伝承に幾つかの重大な混乱が含まれているように思われる。そこでこの時期のスパルタ政治史研究の不可欠の前提として、本稿では、当時スパルタが関わった戦争の年代や性質について全面的に検討、整理してみようと思う。

一、第二次メッセニア戦争

重要でない一つの伝承を度外視すれば、第一次メッセニア戦争の次にスパルタが経験した戦争は、スパルタにたいするメッセニア人の反乱、すなわち第二次メッセニア戦争であった。⁽⁷⁾ この戦争の年代決定のために利用することのできる最も信頼性のある史料は、Strabon と Pausanias が引用している Tyrtaios の詩の断片で、「われらの父たちの父たちが槍をふるって」メッセネを奪い取ったと歌われている。⁽⁸⁾ Tyrtaios は、第二次メッセニア戦争にあたってスパルタ人を激励した詩人であるが、この断片が言及しているのは第一次メッセニア戦争のことである。第一次メッセニア戦争の年代は、以前に述べたようにほぼ前七四三—七二四年であり、⁽⁹⁾ そのときから数えて二世代後の「われら」が第二次メッセニア戦争を戦ったことになるから、一世代の長さを約三〇—四〇年とすれば、⁽¹⁰⁾ 第二次メッセニア戦争は、ほぼ前六八〇年代から前六四〇年代のあいだに戦われたとみることができ。⁽¹¹⁾

ところで、この戦争について最も詳細に報告している Pausanias は、戦争の開始と終結の年をそれぞれ前六八五年、前六六八年としている。⁽¹²⁾ この絶対年代は、Tyrtaios の詩の断片から推定される上記の年代の枠の範囲内には入るが、新村氏が論じているとおり、信頼性に疑問がある。⁽¹³⁾ とくにスパルタは、メッセニア人との戦いのほかに、

前六六九年にはアルゴリスのヒュシアイでアルゴスと戦って敗北を喫したと伝えられるが、⁽¹⁴⁾ かりに第二次メッセニア戦争にかんする Pausanias の年代を認めると、スパルタは、メッセニア人との戦いに全力を傾けていた最中にアルゴリスに侵入し、しかも、そこで敗れた翌年に第二次メッセニア戦争を勝利をもって終えたことになり、無理の感をまぬがれない。むしろ新村氏その他の研究者が推定しているように、⁽¹⁵⁾ ヒュシアイでのスパルタの敗北がメッセニア人に蜂起の機会を与え、スパルタを苦しめる大反乱が勃発したのだ、と考えるほうが自然である。そこで、第二次メッセニア戦争の開始は前六六〇年代前半とみるのが妥当、ということになる。

また上記の Pausanias の伝えるこの戦争の開始の年と終結の年によって計算すると、戦争の期間は一七年間となるが、Pausanias の具体的な戦争経過の叙述を辿ってみると、その期間は一四年間となり、⁽¹⁶⁾ しかも、そのうち最後の一一年間のヒーラの戦いは、第二節で論ずるように、実は前四九〇年ごろに属し、第二次メッセニア戦争とは関係がない。したがって、第二次メッセニア戦争の期間は非常に短かったのではないか、との疑問が生ずる。しかし一四年間とは異なる期間を与えることになる戦争開始と終結の年を Pausanias が記録しているのは、かえってこの二つの年にかんする伝承上の根拠の存在を示すように思われる。また Tyrtaos は、当時のスパルタ人に一九年間続いた第一次メッセニア戦争を想起させているが、⁽¹⁷⁾ これは、第二次メッセニア戦争がその期間の点でも第一次メッセニア戦争に匹敵するものであったことを暗示する、と考えてよいであろう。それゆえ、さしあたりここでは、第二次メッセニア戦争はやはり十数年間続き、その終結は前六五〇年代後半であったと推定してみたい。

第二次メッセニア戦争の年代についてのこの結論は、今日の多数説とも一致する。⁽¹⁸⁾ もっとも、その年代を前七世紀の後半まで引き下げる二、三の見解があるが、⁽¹⁹⁾ いずれもとくに説得性のある根拠に基づくものではないようである。これに反して、Kiechle はこの戦争の年代を前七世紀の末に置いている。⁽²⁰⁾ メッセニア史および前古典期のラコニア

史の研究にたいして最近重要な寄与をした彼の説であるだけに、これは一応検討を要すると言わなければならない。まず、Kiechle の説に従うと、第一次、第二次の両メッセニア戦争の間隔が延びて約一世紀間となり、Tyrtaios の「われらの父たちの父たち」という言葉と適合しなくなる点について、Kiechle は「Tyrtaios のこの詩句は文字通りに「祖父たち」をさすのではなくて、むしろ一般的に「父祖たち」を意味すると解釈して、問題を解決しようとする⁽²¹⁾。しかしこれは、問題の詩句が祖父たちの意味ではないとの積極的な証明にはならない。かえって彼自身別の箇所ではその詩句を「祖父たち」の意味にとっている⁽²²⁾。また彼が引用している Tyrtaios の別の詩の断片に「子たちの子たち」という言葉があり、この一句は、彼も認めているように「孫たち」を意味するから、問題の「父たちの父たち」も「祖父たち」と解するほうが当っている可能性が大きい、と言ってよいであろう。

第二に Kiechle は、「父たちの父たち」を含むこの詩の意図は、第一次メッセニア戦争の戦士たちの偉大な功業を思い出させて、現在第二次メッセニア戦争を戦っているスパルタの同胞を励ますことにあったから、聴者の印象を鮮明にするために、「Tyrtaios は実際の年代にはこだわらないで、第一次メッセニア戦争をそれほど昔のことではないように描いた、とも考えられると述べている⁽²⁴⁾。しかし一世紀まえの出来事を二世代まえの出来事のように間隔を圧縮して表現することが、印象を強める点でどれだけ効果があつたのか疑問である。とくに第二次メッセニア戦争のとき、この戦争の戦士の祖父たちの中には、まだ生在している者もいたはずであるから、実際には祖父たちが第一次メッセニア戦争を戦ったのではないのに、そうであったかのように描き出したとすれば、聴者に与える印象としてはかえって逆効果だったのではあるまいか。したがって、Kiechle が一步譲って、「父たちの父たち」を「祖父たち」と読む可能性をも承認するのならば、⁽²³⁾これらの「祖父たち」が第一メッセニア戦争を戦ったのだと考えるほうが、「Tyrtaios の詩句の素直な解釈であろう。

次に第三点として Kiechle は、二三〇年を経てあらたにメッセネに人々を住ませたと Epameinondas に述べさせている Ploutarchos を引いてゐる。⁽²⁵⁾ この史料は、レウクトラの戦いの翌年の前三七〇年に Epameinondas が解放するまで、メッセニア人が二三〇年間スパルタの支配のもとにあったことを語っているから、それに従えば、メッセニアがスパルタによって自由を奪われたのは前六〇〇年ごろとなり、これが第二次メッセニア戦争の結末を意味する、と Kiechle は主張するのである。

しかし、この第二次メッセニア戦争の終結から前三七〇年のメッセニア人の独立回復までの年数を、Pausanias はある箇所⁽²⁶⁾で二八七年としてゐる。これによれば、第二次メッセニア戦争は前六五七年に終つたことになる。Ploutarchos の二三〇年と Pausanias の二八七年というこの不一致に関連して、Den Boer は、Ploutarchos における Epameinondas が利用した伝承は、七代というスパルタ王の世代数を伝えていたのであつて、これを Epameinondas が一代三〇年、三代百年として計算して得られた数字が二三〇年であり、もし一代四〇年として計算すれば、七代では二八〇年になると指摘している。⁽²⁷⁾ また Ploutarchos は同じ箇所⁽²⁸⁾で、ラコニアは前三七〇年まで五百年間荒掠を受けたことがなかった、と Epameinondas が言及したとしてゐるが、その Ploutarchos が他の箇所では、この五百年間を「六百年をくだらない期間」と記して、⁽²⁸⁾ 食い違いをみせてゐる。したがって、Ploutarchos の二三〇年にあまり信頼を寄せることは危険である。一方、Pausanias の二八七年という厳密な数字には、多かれ少なかれ信頼できる何らかの伝承上の根拠があるようにみえる。たしかに Huxley が指摘するところ⁽²⁹⁾、この数字に基づいて算出される前六五七年という第二次メッセニア戦争終結の年は、Pausanias が他の箇所において明らかに一定の証拠によって与えてゐる前六六八年と⁽¹²⁾、正確には一致しない。しかし両者の差異は僅かであり、少くとも、第二次メッセニア戦争終結の実際の年がほぼこのあたりであつたことを推定する妨げにはならないと言つてよ

い。Kiechle の第三の論拠が採用しがたいことは、以上の考察から明らかであらう。

Kiechle の第四の論拠は、南イタリアのレギオンの僭主 Anaxilas と、その先祖 Alkidamidas にかんする Pausanias の伝承である。⁽³⁰⁾ Pausanias によれば、Alkidamidas は、第一次メッセニア戦争に敗れたのちメッセネからレギオンに移住したメッセニア人であり、その第三代目の子孫 Anaxilas は、第二次メッセニア戦争に敗れたメッセニア人をイタリアに招き、シシリーのゼンクレを占領させた。ところで Pausanias は、Anaxilas のこの活動の年代を前六六四―六六一年としているが、第一次メッセニア戦争が前七二四年ごろに終わったとすれば、⁽³¹⁾ その間の約六〇年間に Alkidamidas と Anaxilas を含めて四人もの人物を挿入するのは、無理である。このような無理を Pausanias があえてした形になったのは、彼が利用した史料がすでに、Anaxilas を Alkidamidas の第三代目の子孫としていたことによるのであり、したがって、この世代数には伝承上の根拠があるとみななければならない。また Anaxilas が死んだのは前四七六年のことであったから、Pausanias のように Anaxilas の年代を前七世紀前半に置くことは不可能である。そもそも Pausanias の誤りは、Alkidamidas と Anaxilas をそれぞれ第一次、第二次メッセニア戦争と結びつけた点にあり、むしろ、前四七六年に死んだ Anaxilas から数えて第四代目の先祖 Alkidamidas の年代を前七世紀末とし、ここに第二次メッセニア戦争を置くべきである、というのが Kiechle の主張である。⁽³²⁾

たしかに、Anaxilas が僭主としてレギオンを支配したのが前五世紀の初めであったことは、広く認められているから、⁽³²⁾ その第三代目の先祖 Alkidamidas の年代を前六〇〇年ごろとみるのは妥当であらう。しかし Pausanias は、この Alkidamidas を第一次メッセニア戦争と結びつけて報告しているのみである。そして第一次メッセニア戦争後に、敗北したメッセニア人の一部がメッセニアをあとにして、レギオン市の建設に参加したことは事実と考

えられるが、⁽³³⁾同様のことが前六〇〇年ごろにも起ったか否かを、Pausanias から確言することはできない。たとい起ったとしても、第二次メッセニア戦争と呼ばれるメッセニア人の大反乱はそれとは別である、と考えることは十分可能である。実際、二、三の説は、第二次メッセニア戦争とは別のものとして、前六〇〇年ごろにメッセニア人がスパルタと戦って敗れたことを認めている。⁽³⁴⁾したがって、Alkidamidas と Anaxilas にかんする Pausanias の伝えを用いて、第二次メッセニア戦争の年代を前七世紀末とする理由は乏しいと言わなければならない。

最後に第五に、Kiechle は Theopompós の一断片を引用して、シュロスの哲学的散文作家 Pherekydes がメッセネ人 Perilaos に警告したように、⁽³⁵⁾Pherekydes の存命中にメッセネが占領されたとし、それを第二次メッセニア戦争の結末と解している。⁽³⁶⁾Kiechle は Pherekydes の年代を前七世紀末に置いているようであり、Huxley のように、それと見解をほぼ等しくする者もある。⁽³⁷⁾しかし、Pherekydes の年代にはさまざまな伝えがあるが、通説は前五五〇年ごろとしているから、⁽³⁷⁾彼の年代を前六〇〇年ごろと推定しうる可能性は大きいとは言えない。また Theopompós は、メッセネの占領が Pherekydes の存命中に起ったとは明言していない。それは Pherekydes 死後の事件だった可能性もある。そのうえ、問題の Theopompós の断片の内容には伝説的な色彩が濃く、どこまで史実性があるのか疑わしい。したがって、この断片を第二次メッセニア戦争が前六〇〇年ごろに戦われたことの証拠にするのは、けっきょく無理であろう。

以上の検討によって、Kiechle の主張はほぼ斥けることができたと考えられるから、第二次メッセニア戦争の年代としては、やはり前六六〇年代前半—六五〇年代後半を想定するのが妥当である。

しかし第二次メッセニア戦争にかんしては、なお言及しなければならない二、三の付随的な問題がある。それはまず、Huxley が、この戦争後、前七世紀の半ばすぎにスパルタとメッセニアの戦いがあったことを想定している

点である。⁽³⁸⁾ 彼が引用する Pausanias は、その戦いがスパルタ王 Polydoros の孫 Anaxandros の治世に行なわれたことを述べている。⁽³⁹⁾ Huxley は、Polydoros の即位を第一次メッセニア戦争後まもなく、彼の暗殺を前六六九年のヒュシアの戦いのやや前とし、⁽⁴⁰⁾ それによって彼の孫の代の対メッセニア戦を前七世紀後半に置こうとする。しかし Huxley が引いている Pausanias は、明らかに、その戦いをメッセニア人の反乱、すなわち第二次メッセニア戦争とみている。またすでに以前に扱ったところであるが、Polydoros は第一次メッセニア戦争のときのスパルタ王であり、この王の暗殺は、第一次メッセニア戦争後それほど長い時を経ないで起ったように思われる。⁽⁴¹⁾ とすれば、Polydoros の孫 Anaxandros の代の対メッセニア戦を第二次メッセニア戦争とみなすのが妥当であることは、先に挙げた Tyrtaos の詩句の証言からも明瞭である。したがって、Huxley が推定するような、第二次メッセニア戦争とは別の、前七世紀後半の Anaxandros 時代のスパルタとメッセニアの戦いは存在しなかった、と言つてよい。

次に、Kiechle と Huxley は、前六〇〇年ごろにスパルタがメッセニアのピュロスとモトローネー（メトローネー）を征服したと考えている。⁽⁴²⁾ Pausanias は、この出来事を第二次メッセニア戦争に直接引続いて起ったものとして伝えている。⁽⁴³⁾ Kiechle は、ピュロス人とモトローネー人は、この戦争において、反乱したメッセニア人に味方したため、スパルタの勝利が明らかとなるや海路故郷を脱出し、そのあとスパルタが両市を占領したと推定し、第二次メッセニア戦争の年代を前七世紀末としたことから、スパルタによるピュロス、モトローネーの征服も同じ時期とみるのであるが、第二次メッセニア戦争の年代についての彼の説は否定されたから、ピュロス、モトローネー陥落の年代にかんしても、当然彼に従う必要はない。

一方 Huxley は、この両市の陥落によってメッセニアの反乱は最終的に鎮圧されたと解し、また Epameinondas による解放の二三〇年前、すなわち前六〇〇年ごろにメッセニア人がスパルタに隸属するようになったとの、先に

引用した伝承⁽²⁵⁾を利用して、ピュロス、モトローネーの占領がそのころ行なわれたと主張しているが、すでに指摘したように、この二三〇年という数字は必ずしも信用できない。また彼は、スパルタが、モトローネー占領後、アルゴス王 Damokratidas によって最近追放されたナウブリア人をその地に移住させた、との Pausanias の伝えを用い⁽⁴⁴⁾、このアルゴス王の治世を前七世紀後半と推定して、ピュロス、モトローネー占領の年代を前七世紀末とみなす理由の一つにしている。しかし Kiechle と Forrest によれば⁽⁴⁵⁾、Damokratidas は Pheidon から数えて少くとも第五代目以後のアルゴス王ということが明らかになるのみであり、Pheidon の年代もなお決定しがたい現状においては、Pheidon との関係において Damokratidas の年代を定めることはできない。それゆえ、この線からピュロス、モトローネー占領の年代を確定することは不可能である。さらに、Huxley は第二次メッセニア戦争の年代を前六六〇年代と置いているから⁽¹⁸⁾、この戦争に引続いてピュロス、モトローネーが占領されたという Pausanias の伝承を否定しない限り、両市占領の年代を前六〇〇年とすることは矛盾であるのに、彼はその Pausanias の伝承否定の試みをしていない。したがって、Kiechle と同じく、Huxley の主張にも説得性がないと言わなければならない。結局、この問題において最も基本的な伝承は右の Pausanias のそれであり、ここでもそれによって、ピュロス、モトローネー占領の年代を前六五〇年ごろとみるのが、むしろ妥当であろう。

ピュロス、モトローネー攻略戦を含む第二次メッセニア戦争が、前七世紀のギリシアの大戦争の一つであったことは、十数年にもわたったその期間の長さのほかに、スパルタ、メッセニアともに全力を傾けて戦ったという事実からも容易に推測される。第一次メッセニア戦争によってスパルタが占領したのは、メッセニアの全土ではなかったとの有力な説があるが⁽⁴⁷⁾、その点がどうであれ、第二次メッセニア戦争にはすべてのメッセニア人が直接間接に参加したものと考えられる。これにたいしてスパルタ側では、Tyraios が、死を賭して第二次メッセニア戦争を戦い

抜くようにスパルタ人を激励した。⁽⁴⁸⁾そこで呼びかけられたのは重装歩兵と軽装歩兵の両者、すなわち全スパルタ人であり、彼らはその呼びかけに応えて、必死の覚悟をもってメッセニア人と戦ったであろう。

さらに、この戦争は、Pausaniasによれば第二年目の「猪塚」の戦いから、ペロポネソス半島全域におよぶ一種の国際戦争に発展した。すなわち、スパルタ側にはコリントスとレブレオンがつき、⁽⁵⁰⁾メッセニア側にはアルゴス、エリス、ピサ、アルカディア、シキュオンが味方したと言われる。⁽⁵¹⁾これらの同盟者のうちエリスについては問題があるが、このような戦争規模の拡大が、スパルタ、メッセニアの双方にますます大きな犠牲を強いる結果になったことは明らかであろう。しかし、この場合、メッセニアは、スパルタを大きく包囲する反スパルタ同盟ともいえるべきものの結成に成功したとみることができから、その限りにおいてスパルタはいっそう苦しい立場に立たされたように思われる。実際、Pausaniasは「猪塚」の戦いがメッセニアの完勝であったことを伝えている。⁽⁵³⁾この戦いの叙述にどこまで史実性があるかどうか問題はあるが、このような敗北をスパルタ側が第二次メッセニア戦争中に何度か経験したことは、おそらく想像して誤りが無いであろう。それゆえ、最終的には反乱を鎮圧して勝利をおさめたとはいえ、スパルタがこの戦争によって重大な打撃を受けたことは疑う余地がないと言ってよい。そして、それはまた、スパルタ国内の政治や社会に深刻な影響を与えることになったにちがいないのである。

二、ヒーラの戦い

前節では、第一次メッセニア戦争後にスパルタが経験した最初の戦争は、前六六〇年代前半から前六五〇年代後半にかけての第二次メッセニア戦争、およびそれに引続いて起ったビュロス、モトローネー攻略戦であったことを明らかにした。ところで Pausanias の伝承によれば、第二次メッセニア戦争の第四年目からは、Arisomenes に率

いられたメッセニア人が立て籠ったエイラ（ヒーラ）の攻防戦が始まり、その戦いの一年目にこの城砦が陥落して、第二次メッセニア戦争はスパルタの勝利をもって終結した。⁽⁵⁴⁾ Pausanias がこのヒーラの戦いを伝えるにあたって利用したのは、前三世紀のクレタの叙事詩人 Rhianos の “Messeniaka” であったが、⁽⁵⁵⁾ 同く Pausanias は Rhianos が歌っているのは、第二次メッセニア戦争第三年目の「大溝」の戦いより後の出来事であると指摘している。⁽⁵⁶⁾ したがって、Pausanias が第二次メッセニア戦争の経過を叙述するにあたって用いた史料は、「大溝」の戦いまでと、ヒーラの戦いとは異なっていたことになる。しかも単にそれだけではなく、実は彼がヒーラの戦いを第二次メッセニア戦争の一部とみなしたのは誤りであって、Rhianos が歌ったヒーラの戦いは、それより遙かに遅く、前四九〇年ごろに戦われたということが一八九九年に Ed. Schwartz によって主張され、以来その説が通説化して今日に及んでいる。⁽⁵⁷⁾

この通説に従うならば、ヒーラの戦いは年代的に本稿の考察の外に來るので、ここで取上げる必要はないが、Wade-Gery が最近この戦いの年代を前六〇〇年ごろと推定した。⁽⁵⁸⁾ この年代はまさに本稿の扱う範囲内であるから、以下、本節ではしばらく彼のこの推定の当否を検討してみることにした。

Wade-Gery は、右のように推定する理由として、まず第一に、Pausanias が、第二次メッセニア戦争中のスパルタ王を、Rhianos が Leotychidas としているのは間違であると述べている点⁽⁵⁹⁾を取上げ、Pausanias は、Leotychidas という名のスパルタ王は、前四九一—四七六年在位の唯一人しか知らなかったが、実はもう一人、前六〇〇年ごろ在位の Leotychidas 王があり、Rhianos が言及しているのは、この Leotychidas I であったと主張している。たしかに Eurypon 家のスパルタ王には、前七世紀末と前五世紀前半と二人の Leotychidas がいた。⁽⁶⁰⁾ しかし、⁽⁶¹⁾ Pausanias が記しているところからは、Rhianos が歌った Leotychidas は一世なのか二世なの

か決定することができない。したがって、この第一点は何ら積極的な結論を導き出すものではない。

そこで Wade-Gery は次に第二の理由として、メッセニアからレギオンに移住した Alkidamidas の曾孫である Anaxilas が、ヒーラ失陥とともにスパルタに敗れ去ったメッセニア人を西方に招いたとの、第一節で引用した Pausanias の箇所⁽³⁰⁾を利用する。すなわち Wade-Gery は、前五世紀の初めの Anaxilas の名は Rhanos の “Messeniaka” には現れなかったとみなして、Anaxilas とヒーラの戦いとの結びつきを断ち切ったうえで、前六〇〇年ごろの Alkidamidas に対しては西方への移住の可能性を推定し、しかも、この移住がヒーラの戦いの結果であることを示唆するのである。たしかに、Pausanias が引用した限りの Rhanos は、Anaxilas に言及しなかったかもしれない⁽⁶¹⁾。しかしこの事実だけでは、Anaxilas をヒーラの戦いと無関係であったと結論することはできない。またすでに第一節で述べたように、Alkidamidas は、Pausanias においては、第一次メッセニア戦争後にレギオンに移住したように描かれているのみであり、前六〇〇年ごろにヒーラの戦いと Alkidamidas の移住が行なわれたかどうかを、Pausanias から明らかにすることは不可能である。むしろ、Alkidamidas が第一次メッセニア戦争後の移住と結びつけられたのは、彼がこの移住に参加した有力な人物の子孫だったためであり、また、Anaxilas を紹介するさいに、その第三代目の先祖としてとくに名を挙げられたのは、その家を盛んにするなど、何らかの著しい働きによって家系中で著名な人物だったためであって、彼自身は敗戦にともなうメッセニアからの移住者ではなかったと解することも、十分可能な推定である。したがって、いずれにしても Wade-Gery の第二の理由には、確実な根拠がないと言わなければならない。

第三に Wade-Gery は、ヒーラの陥落後 Aristomenes が姉妹の Hagnagora をフィガリア (フィガレイア) の Tharyx と結婚させた⁽³²⁾と伝える Pausanias の箇所を引用し、この結婚を前六〇〇年ごろとして、ヒーラの戦い

の年代をそれに合わせようとしている。Pausanias は Aristomenes の三人の娘が、それぞれレブレオンの Damoidas, ヘライアの Theopompos, ロドスの Damagetos と結婚したことをも伝えているが、Wade-Gery も指摘しているように、フィガレイアが、ロドス、ヘライア、レブレオンのどこよりもヒーラに近いこと、三人の娘と違って姉妹だけが名を記されていることなどから、Hagnagora と Tharyx の結婚は事実であった可能性が大きいと考えられる。しかし Wade-Gery によれば、Tharyx の子孫とみなされ、かつ年代を推測することのできる最も古い人物は、Damaretos I で、その年代は前四一〇年ごろとされる。それゆえ、この事実だけからは、Tharyx の結婚の年代、したがって Aristomenes およびヒーラの戦いの年代を前六〇〇年ごろに置く必然性は出てこない。Wade-Gery もそのことは意識しており、史実と考えてよい Tharyx と Hagnagora の結婚は、むしろ次の第四の理由の不可欠の一環をなすものとして、ヒーラの戦いの年代決定に密接に関連する、と彼は理解しているのである。

すなわち、Wade-Gery は最後の理由として、スパルタがフィガレイアを占領したとの Pausanias の伝承を提出する。⁽⁶⁴⁾ Pausanias によれば、それは前六五九年のことであったが、他方ヒーラの陥落は前六六八年⁽¹²⁾または前六五七年⁽²⁶⁾のこととされており、Wade-Gery は、与えられたフィガレイア占領とヒーラ陥落の絶対年代そのものは無視して、両者が接近している事実から互に関連していたことだけを指摘する。ここで、第三の理由を検討したときに紹介したように、ヒーラの陥落後 Aristomenes が姉妹の Hagnagora をフィガレイアの Tharyx と結婚させたとすれば、ヒーラ陥落前からメッセニア人とフィガレイア人が友好協力関係にあったと想像することは容易であり、したがって、ヒーラ占拠後まもなくスパルタがアルカディアのフィガレイアを攻撃占領したと考えることができるであろう。しかし、上記の Pausanias はさらに続けて、フィガレイア人はオレスタシオン人の助力を得て、

スパルタの手からフィガレイアを奪回したことを伝えている。Wade-Gery は、当時オレスタシオンを含むメガロポリス平野南部はテゲアに属していたので、オレスタシオンがスパルタと事を構えたことが、テゲアをもスパルタとの抗争に巻き込んだと推測する。そして Herodotos が伝えているものこそ、この抗争に他ならないとし、また、Ploutarchos が伝えている、「(テゲア人は)メッセニア人をテゲア領より追放すべきこと」との条項を含むスパルタ、テゲア間の条約は⁽⁶⁶⁾、この抗争終結と和解のときのものであると主張する。Wade-Gery によれば、Herodotos はこのスパルタのテゲア侵略戦の年代を前五七五―五四五年ごろに置いている。それゆえ、この戦争から遡って、その誘因をなしたフィガレイアの攻略、奪回戦を経て、ヒーラの陥落の年代を前六〇〇年ごろとすることができるといのが Wade-Gery の見解である。

以上の第四の理由は複雑、巧妙に構成されているが、やはり欠陥を持っている。第一に Wade-Gery は、Pausanias はヒーラ陥落の年を前六六八年または前六五七年に置いているとするが、Pausanias の場合、これは第二次メッセニア戦争終結の年を意味する。この年と、Pausanias の与えるフィガレイアの戦いの年とを比較すれば、彼は年代上第二次メッセニア戦争中ないしそれに引続いてフィガレイア攻防戦が戦われたと述べている、とみるのが自然である。フィガレイアはヒーラに隣接しており、また第二次メッセニア戦争中にメッセニアを助けたアルカディアのオレスタシオンとは、援助を受けるような関係に当時あったのであるから、Tharyx と Hagnagora の結婚という要素を考慮しなくとも、スパルタが第二次メッセニア戦争中かそれに続く時期にフィガレイアを攻撃したことは、十分ありうると言わなければならない。⁽⁶⁷⁾

第二に Wade-Gery は、Herodotos がヒーラの戦いについて何ら言及していない点を説明するために、数次のメッセニア戦争は前三七〇年まで当事者以外には知られなかったと述べている。しかし、Herodotos の伝えるス

パルタ、テゲア戦が、Wade-Gery の推測するように、ヒーラの戦い、フィガレイアの戦いとの関連、継続において起つたとすれば、スパルタ、テゲア戦については詳細な情報を手に入れることができた Herodotos が、その直接の誘因となつたフィガレイアの戦いやヒーラの戦いについて何も聞かなかった、ということはあるまいか。そして、もし何かを聞いたとすれば、この場合それを記さなかったとは考えられないから、結局、スパルタ、テゲア戦とフィガレイアおよびヒーラの戦いとは、年代を異にして互いに無関係に起つたと解するほうが妥当である。また、Ploutarchos の伝えるスパルタ、テゲア間の条約が、Herodotos の伝えるスパルタ、テゲア戦終結時のものであることは、Wade-Gery の指摘するところと考えられるが、その条約がメッセニア人の追放をテゲア人に義務づけているのは、そのしばらくまえにヒーラの戦いがあつたためとしない理由は、必ずしもない。第二次メッセニア戦争後、莫大な数のメッセニア人へイロータイの抑圧に絶えず神経を使っていたスパルタが、前五五〇年ごろ北方の隣国テゲアを抑えて、これと結んだ条約に、テゲアがメッセニア人を受け入れない主旨の条約の記載を要求したことは、むしろ当然であつたと言つてよい。

こうして、Wade-Gery の挙げる第四の理由も成立たないことが明らかになつた。彼はその他の理由を挙げないから、結論として、ヒーラの戦いを前六〇〇年ごろに置くかうとする彼の試みは成功しなかつた、とみなしてよいであらう。⁽⁶⁹⁾

それでは、ヒーラの戦いの年代を前四九〇年ごろとする通説は果して妥当であらうか。この問題にここで立入る余裕はないが、通説を支持すると思われる点を幾つか挙げることは容易である。まず、前五世紀の初めのレギオンの僭主 Anaxilas は、ヒーラの戦いに敗れたメッセニア人を西方に招いたと伝えられている。⁽⁵⁹⁾ また、Rhianos によれば、ヒーラの戦いの際のスパルタ王は Leotychidas であるが、⁽⁵⁹⁾ この王は前五世紀の初めに在位した Leo-

tychidas II と考えられる⁽⁷⁰⁾。さらに Platon は、前四九〇年のマラトンの戦いのとき、スパルタ軍がアテナイ軍救援に一日違いで遅れたのは、当時スパルタがメッセネと戦っていたからであると述べている⁽⁷¹⁾。これにたいして、マラトンの戦いにかんして最も重要な史料を提供する Herodotos は、スパルタ軍のマラトン到着が遅れたのは、満月になるまで待つというスパルタの宗教的伝統のためであったと伝えるのみで、スパルタとメッセニアの戦いのことには何も触れていないが、それだからといって Platon の伝承を否定しなければならぬ理由もない⁽⁷³⁾。そしてそこに言及されている戦いが、ヒーラの戦いであったと考えられる。ただ一つ、Pausanias によれば、ヒーラ陥落後に Aristomenes の娘と結婚したロドスの Damagetos の第三代目の子孫の名は Diagoras であつたが、Wade-Gery は、この Diagoras がオリュンピア競技で優勝した年を前四六四年としてゐる⁽⁷⁵⁾。この Pausanias の与える系図を信用すれば、ヒーラの戦いを前四九〇年ごろとみなすことは不可能になる⁽⁷⁶⁾。Pausanias は Diagoras の父の名をやはり Damagetos としているので、Aristomenes の娘と結婚したのはこの Damagetos であつたと考えて、ヒーラの戦いの年代を前四九〇年ごろとする見方を維持しようとする者もある⁽⁷⁷⁾。これも確かに困難を切り抜ける一方法であるが、このような変更を積極的に支持する証拠がないという弱点がある。一方 Wade-Gery は、Aristomenes の姉妹や娘の結婚先のうちで、ロドスだけがとびぬけてヒーラから遠い点を挙げて、Aristomenes の娘と Damagetos の結婚の史実性を強く疑っているが、これは説得力のある見解である。それゆゑ、この結婚にかんする Pausanias の伝承は、ヒーラの戦いの年代決定のためには利用しえない、とみるのが適當である。したがって、以上の簡単な考察から、ヒーラの戦いの年代を前四九〇年ごろとする通説を、やはり承認することが許されると言つてよいであらう。

三、対アルカディア戦以後のスパルタ

前節では、ヒーラの戦いの年代を前六〇〇年ごろと推定する Wade-Gery の説を斥けたが、同じころスパルタは、テゲアを中心とするアルカディア地方と長期にわたる闘争に入っていたように思われる。本節ではまずこの問題を考察してみよう。

Herodotos は、Leon と Hegesikles が王であったとき、スパルタ人は他の戦争には成功しながら、ひとりテゲア人にたいしてのみ敗北を喫していたと伝えているが、⁽⁷⁹⁾ Pausanias の伝えでは、Leon の父 Eurykrates II と Leon の二代にわたってテゲア人に敗れていたことになっている。⁽⁸⁰⁾ スパルタの対テゲア戦の失敗を叙述する Herodotos の筆は、年代の前後関係について明確さを欠いているが、最初の敗北が Leon より前に遡る可能性を否定する文脈には、必ずしもなっていないと考えられる。⁽⁸¹⁾ それゆえ、対テゲア戦開始の時期にかんしては、Pausanias の伝承を否定する必要はないであろう。しかしその場合、Herodotos が Eurykrates II の名を挙げていないのは、対テゲア戦は Eurykrates II の子 Leon のときから本格化し、それまでは前哨戦の段階にとどまっていたため、と解釈することもできる。したがってここでは、スパルタの対テゲア戦は Eurykrates II 時代、しかもその治世末期に始まったと想定してみることにする。

Leon の父である Eurykrates II の父は、第一節で述べたように、第二次メッセニア戦争のときの王 Anaxandros であり、またこの Anaxandros の祖父が、第一次メッセニア戦争のときの王 Polydoros であった。⁽⁸²⁾ として Polydoros が王位に即いたのは前七三〇年代前半と考えられるから、⁽⁸³⁾ Eurykrates II の即位はそれから百年後の前六三〇年代前半、また次の Leon の治世は前六〇〇年代前半から始まったとみなすことができる。それゆえ、対テ

ゲア戦開始の絶対年代は前六一〇年ごろ、あるいは前七世紀末となるであらう。⁽⁸⁴⁾

他方、この戦争の終結にかんしては、Leonの子Anaxandridas IIの治世にスパルタはテゲアにたいして優位を確保するにいたった⁽⁸⁵⁾、と伝えられている。こゝで、Anaxandridas IIの治世は、前五七〇年代から約三、四〇年間と考えられる。またHerodotosは、スパルタがテゲアを抑えたのは、前五六〇—五四六年在位のリュディア王Kroisosの時代であり、その首都サルディエス(サルディス)が陥落した前五四六年前を余り遡らないときであったように記している。⁽⁸⁶⁾したがって、スパルタの優位をもって対テゲア戦の終った時期を、前五五〇年ごろと推定することができる。⁽⁸⁷⁾

こうして、スパルタの対テゲア戦はたつぷり半世紀間の長きにわたったことになるが、そのあいだには休戦期間があつて、絶え間なく戦闘が続いたわけではない。⁽⁸⁸⁾しかし、スパルタが最初のテゲア侵略戦に予期に反して大敗北を喫したことは、Herodotosの伝えるところであり、その後もテゲアにたいして何度も敗れたことが、Herodotos, Pausanias 両者から容易に想像される。また、Pausaniasはスパルタの敵をもっぱらテゲアとみており、Herodotosも、スパルタは最初他のアルカディア人には手を出さず、テゲア人へのみ兵を向けたと述べ、その後の時期についても対テゲア戦に中心を据えて叙述しているが、LeonとHegesiklesのとき、スパルタ人は他の諸戦争には成功していたとのHerodotosの言葉は、テゲア人を主要な相手としつつも、スパルタがそれ以外のアルカディア人とも戦つたことを明らかにしている。アルカディア人は第二次メッセニア戦争中にメッセニアを支援したから、そののち約半世紀を経てスパルタがアルカディアに侵入したとき、テゲア以外の地方にも攻撃を加えたのは、むしろ当然である。しかもその場合、Herodotosの報告に反して、スパルタは、テゲア人以外のアルカディア人からおそらく何回か敗北の経験をなめさせられた。前六世紀の初めから前五〇〇年ごろのあいだに置かれる

クレタの予言者の宗教家 Epimenides のときに起ったこととして、Theopompus が伝えている、アルカディアのオルコメノス付近での、アルカディア人によるスパルタ人の撃破は、その一例であり、ここでは、アルカディア人はすなわちオルコメノス人であったと考えられる⁽⁸⁹⁾。したがって、テゲアを中心とするアルカディアとの長期間にわたる戦争において、スパルタが払った犠牲はけっして小さくなかったと言わなければならない。

スパルタは、前五五〇年ごろにテゲアを中心とするアルカディアとの戦争を終結させたとき、テゲアにたいしては領土の併合を行なうことなく、のちのペロポネソス同盟の原型をなす同盟条約を結んで事を収めた⁽⁹⁰⁾。これを、それまでの対アルカディア戦におけるスパルタの苦戦と結びつけて考えると、そこにスパルタ側の譲歩、妥協をみる⁽⁹¹⁾ことが正しい解釈のように一見思われる。たしかに、その一面を否定することはできないが、第二節で引用したこの条約の一条項は、史料の伝えるスパルタの優位を明らかに前提にしているから、対テゲア戦の本質は、やはり、最終的にはスパルタの勝利をもって終った点にあるとみななければならない⁽⁹²⁾。同様にアルカディア全体についても、スパルタは結局そのかなりの部分を屈服させるのに成功したことを示唆する伝えが、対アルカディア戦の結果を正當に評価していると言うべきである⁽⁹³⁾。すなわち、スパルタは、前七世紀末から前六世紀前半にかけての長期間の苦しい対アルカディア戦のあいだに、しだいに軍事力を充実させ、ついにアルカディアを圧倒するだけの力を備えるにいたったと推定されるのであり、またこう推定することが、前六世紀半ばごろおよびそれ以後のスパルタの他の対外戦争の経過ともよく適合するのである。

まず、前一五〇年ごろのバピルスの一断片は、前六世紀半ば⁽⁹⁴⁾の有名なエフォロス Chilon と Anaxandrides II が、遠征によってシキュオンの僭主 Aischines、アテナイの僭主 Hippias と Peisistratos を追放したと伝えている⁽⁹⁵⁾。また Ploutarchos は、その他にもスパルタが追放した多くの僭主の名を挙げている⁽⁹⁶⁾。Huxley は、Plou-

tarchos の記すコリントスをエウボイアのケリントスに訂正し、シキュオンの Aischines、ケリントスとアンブラキアの Kypselos 家の僭主たちのスパルタによる追放が、Chilon のときに行なわれたとみている⁽⁹⁸⁾。さらにスパルタは、前六世紀の後半になると、僭主 Polykrates 治下のサモスに遠征したり⁽⁹⁷⁾、Hippias をアテナイから追放したりしている⁽⁹⁸⁾。すなわち、スパルタは、ギリシア各地の僭主政打倒の行動に、前六世紀半ばごろから積極的に乗り出したことがわかるのである。

また、同じ前六世紀半ばごろに、スパルタはアルゴスに対しても重要な勝利をおさめた。Herodotos によれば、Chilon は、キュテラ島は海中に沈んだほうがスパルタには有利であると語った⁽⁹⁹⁾。これを Herodotos の他の箇所と結びつけてみると、Huxley が推定するように⁽¹⁰⁾、この島や、その北のマレア岬に終る半島の東海岸は、当時なおアルゴスによって保持されており、スパルタはこれらの地域からのアルゴスの攻撃に悩まされていたものと考えられる。しかし、その後まもなく、リュディアのサルディスが陥落した前五四六年に、それらの地域の北にあるテュレアをスパルタが占領したので、アルゴスが奪回を試みたが、スパルタは結局アルゴスを撃破して、テュレアを確保した⁽¹⁰⁰⁾。テュレア南方の東海岸地域とキュテラ島のスパルタ領編入が、このテュレア獲得後であったかどうかは、必ずしも明らかでないが、いずれにしても、前六世紀半ばごろにスパルタは、アルゴスにたいして前六六九年のヒュシアの敗北の復讐をなしとげ、ラコニアの領域をテュレア以南のペロポネソス半島東海岸一帯に拡大し、東方からの脅威を大いに減少させることに成功したのである。

以上のように、スパルタは、対アルカディア戦における頽勢を挽回し終った前六世紀半ばごろおよびそれ以降、各方面に活発な対外戦争を展開し、しかも、そのほとんどの場合に最後の勝利を握った⁽¹⁰¹⁾。したがって、この前五五〇年ごろまでにスパルタはその軍事力を確立し、ギリシア第一の陸軍国の地位を獲得するにいたったとみてよいで

あろう。

結 語

本稿において筆者は、前八世紀後半の第一次メッセニア戦争のちに、スパルタが携わった対外戦争を前六世紀半ばごろまで跡づけてみた。その結果、それらの戦争は明確に二つの群に分れることが明らかになった。すなわち、第一群は、前六六〇年代前半から前六五〇年代後半にかけての第二次メッセニア戦争と、それに引続くピュロス、モトローネー攻略戦であり、第二群は、前七世紀末から前六世紀半ばごろまでのテゲアを中心とするアルカディアとの戦争、および前六世紀半ばごろのテュレア以南のアルゴス領の獲得、そのころ以後の諸ポリスの僭主政打倒のための積極的介入である。そして、この二つの群を第一次メッセニア戦争後のスパルタ史の流れの中に位置づけてみると、前七二〇年代に第一次メッセニア戦争が終ったのち、スパルタは、前八世紀末までに Polydorus 王の暗殺、パルテナイのタラスへの植民と結びついた小さな危機を乗り越え、それから三〇年余を経過してみずからアルゴスにたいして戦いを挑み、ヒュシアイで敗北を喫したことが直接の誘因となって、メッセニア人の大反乱をひき起し、第二次メッセニア戦争に巻き込まれた。この戦争でスパルタは苦戦を重ねたが、ようやく十数年後に反乱の鎮圧に成功したところには多少力を回復し、ピュロス、モトローネーの征服をも達成した。それから約半世紀を経た前七世紀末に、スパルタは再びみずから進んで今度はアルカディアに侵入したが、テゲア人を中心とするアルカディア人からかえって手痛い打撃を受け、かなり長いあいだ戦局はむしろ不利であった。しかし、半世紀近く経過するころからしだいにスパルタは優勢となって、ついに前六世紀半ばごろに勝利を獲得し、転じてアルゴスからテュレア以南の東海岸とキュテラ島を奪い、またこのころからギリシア各地の僭主政打倒のためにしばしば遠征を試み、ギ

リシア随一の陸軍国としての地位を確立した。

以上が、第一次メッセニア戦争終結後、前六世紀半ばごろまでのスパルタが経験した戦争と、その年代的布置の大略である。序言において述べたように、この時期のスパルタの政治史は、そのような外枠の中で、またそれと不可分に関わり合いながら発展した。この発展とその意義を明らかにすることが、果すべき次の課題となるが、それは、別に稿を改めて行ないたいと思う。

註

- (1) 拙稿『スパルタにおけるボリスの成立』（『古代史講座』第四卷、学生社、一九六二年、二〇一—五八頁）。
- (2) 拙稿『第一次メッセニア戦争期のスパルタ』（秀村欣二・三浦一郎・太田秀通編『古典古代の社会と思想』、岩波書店、一九六九年、三七—七〇頁）。
- (3) 拙稿『バルテニアイのタラス植民』（『学習院史学』第七号、一九七〇年、一一—四頁）。
- (4) 典型的な一例を挙げれば、第二次メッセニア戦争期のスパルタに党争が起り、窮迫した人々が土地の再分配を要求したことを *Arist., Pol. 1306b-1307a* が伝えている。
- (5) 前四八〇年のサラミス海戦後のアテナイ民主政の発展が最も手近な例を提供する。なお政治と戦争の密接な関連は、どの時代、どの地域の歴史においても見出すことができる。
- (6) *Polyain., Strat. 8, 34*。ここではスパルタ王 *Theopompos* が、テゲア人を中心とするアルカディア人の捕虜になったが、妻 *Chelions* の助けで脱出に成功したことが述べられている。G.L. Huxley, *Early Sparta*, 1962, p. 52 は、この伝承から *Theopompos* 王時代のスパルタはテゲアと戦って敗れたことがあると推定している。これは可能な推定であり、その場合には *Theopompos* 王の治世のうち、第一次メッセニア戦争後にこの事件を置くことも、もちろん不可能ではない。しかし *Huxley* の指摘をまづいてもなく、*Polyainos* のきわめて漠然たる叙述は、このときの敗北が、スパルタないし当時のスパルタを支配していた貴族層にとって、さしたる打撃ではなかったことを反映しているように思われる。さらに *Polyainos* の伝承の信憑性そのものにそもそも問題があり、実は第二次メッセニア戦争中（第一節参照）または前七世紀末以後のスパルタとアルカディア間の抗争（第三節参照）の過程で起った事件が、誤って *Theopompos* 王に結びついて形成さ

れた伝承ではないか、との疑問も感ぜられる。したがって、本文ではこの伝承をぐく立入っては取上げないことにする。

- (7) Huxley を W.G. Forrest, *A History of Sparta 950-192 B.C.*, 1968 のちのちの叙述に用いる。Paus. 4, 14, 6; 15, 1; 4 「反乱」 Paus. 4, 23, 4 「ラマタイヤン人々メッセニア人の二度目の戦争」。
- (8) Tyrt., fr. 5, 6 (Loeb), ap. Str. 6, 3, 3, C 280; 8, 4, 9, C 362; Paus. 4, 15, 2.
- (9) 拙稿『第一次メッセニア戦争期のスパルタ』三九一四〇頁。
- (10) 註(27)にたいする本文参照。
- (11) 註(8)の Tyrtaios の詩の断片から、第一次、第二次両メッセニア戦争間の間隔を二世代と解しているのは、H. Michel, *Sparta*, 1952, p. 16; Huxley, p. 57; H.T. Wade-Gery, *The 'Rhianos-Hypothesis'*, in "Ancient Society and Institutions, Studies Presented to Victor Ehrenberg on his 75th Birthday", 1966, p. 295-296; Forrest, p. 69; V. Ehrenberg, *From Solon to Socrates*, 1968, Chap. 2, n. 32; P. Oliva, *Sparta and her Social Problems*, 1971, p. 112-113; 新井祐一郎『第二メッセニア戦争とスパルタ』(『西洋古典学研究』第二一卷、一九七三年、二二頁)などである。
- (12) Paus. 4, 15, 1; 23, 4, なお終結の年については、註(28)参照。
- (13) 新村、二二—二二頁。
- (14) Paus. 2, 24, 7
- (15) 新村、二二—二四頁。なおその註(11)に挙げられている文獻は、Ehrenberg, Chap. 2, n. 32 を加えることがである。
- (16) 戦争第一年目デライの戦う (Paus. 4, 15, 4), 第二年目「猪塚」Kaprou sema の戦う (Paus. 4, 15, 7), 第三年目「大溝」Megale taphros の戦う (Paus. 4, 17, 2), 第四年目から一年間のエトラ (コーラ) の戦う (Paus. 4, 17, 10) で、合計一四年間。新村、二二頁参照。
- (17) Tyrt., fr. 5, 4-5; 7-8 (Loeb).
- (18) Michel, p. 16 (戦へんを前六五〇年) W. Den Boer, *Laconian Studies*, 1954, p. 81-82 (前六五〇年) Huxley, p. 57 (前七世紀の六〇年代) Wade-Gery, p. 289, 295-296 (前六六〇—六五〇年) Forrest, p. 69 (前六六〇年) 新村、二四頁(エトラの事件直後から前六五七年)など、その約一〇年間) cf. A. Toynebee, *Some Problems of Greek History*, 1969, p. 181 (前七世紀半の decades)。
- (19) A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, 1956, p. 74-75 (前七世紀の半ばまたはそのや後) Ehrenberg, p. 36, Chap. 2, n. 32 (前六五〇—六二〇年) Oliva, p. 112-113 (前七世紀の半ばまたは後半)。

- (8) F. Kiechle, *Messenische Studien*, 1959, p. 76, 131-132, cf. 13, 60; *Lakonien und Sparta*, 1963, p. 242, 245. 『Den Boer』 p. 81-82 に『K. J. Beloch』 u. Th. Lenschau の註 (8) に著者の考を述べ、第1次メッセニア戦争の年代を前100年とする。
- (12) Kiechle, *Mes. St.*, p. 100-101; *Lak. u. Sp.*, p. 242, n. 3. 『Tayntais』のTyrtaiosの詩句の解釈に『Kiechle』 u. 西野の考。
- (22) Kiechle, *Mes. St.*, p. 93.
- (23) Tyr, fr. 12, 30 (Loeb), cf. Kiechle, *Mes. St.*, p. 101, n. 23.
- (24) Kiechle, *Lak. u. Sp.*, p. 242, n. 3.
- (25) Kiechle, *Mes. St.*, p. 11, 56, 60, 120, cf. Plout, *Mor.* 194B. 『Aelian』, Var. Hist. 13, 42 にPloutarchosの『メッセニア戦争』の『100年』を『101年』と改訂する。
- (26) Paus. 4, 27, 9.
- (27) Den Boer, p. 81-82. 『Kiechle, Mes. St.』 p. 60 にPloutarchosの『100年』を『101年』と改訂する。
- (28) Plout, *Agasilas* 31, 2.
- (29) Huxley, p. 58.
- (30) Paus. 4, 23, 5-10.
- (31) Kiechle, *Mes. St.*, p. 11, 119-123.
- (32) 西野 A.G. Woodhead, s.v. Anaxilas (1), in the *Oxford Classical Dictionary*, 2nd ed., 1970, p. 61b に『前494年』と改訂する。
- (33) Kiechle, *Mes. St.*, p. 6-14.
- (34) Huxley, p. 59-60, 132, n. 400; Wade-Gery, p. 289-302; 新村『三十一頁』の『問題』について、なお註(9)参照。
- (35) Kiechle, *Mes. St.*, p. 11, 60, 120, cf. F. Jacoby, *FGH IIB 115*. Theopompos von Chios F71 (Diog. Laert. 1, 116).
- (36) Huxley, p. 60.
- (37) G.S. Kirk-J.E. Raven, *The Presocratic Philosophers*, 1957, p. 49, G.E.L. Owen, *Pherecydes* (1), in *O.C.D.*,

2nd ed., p. 812a.

(38) Huxley, p. 59, 130, n. 377.

(39) Paus. 3, 3, 4-5; 14, 4.

(40) Huxley, p. 39, 59.

(41) 拙稿『第一次メッセニア戦争期のスパルタ』図〇—図一、六六頁。Cf. Paus. 4, 4, 4; 7, 7, 3; 3, 3, 2-3.

(42) Kiechle, *Mes. St.*, p. 31-33; Huxley, p. 59-60.

(43) Paus. 4, 23, 1, cf. 3, 3, 4; 4, 24, 4; 27, 8; 35, 2.

(44) Paus. 4, 35, 2.

(45) Kiechle, *Mes. St.*, p. 32; Forrest, p. 73.

(46) 例へば P.N. Ure-N.G.L. Hammond, s.v. Pheidon, in O.C.D., 2nd ed., 811b 4⁵ Pheidon の年代を前九〇〇—
 八〇〇年と云ふ。

(47) E.g. Forrest, p. 37; Ehrenberg, p. 35. この説にかんしては、本稿が扱う時期のスパルタの政治的發展を論ずる別稿
 において立入って考察した。

(48) Tyrta, fr. 10, 1-2; 11-14; 11, 5-6; 12, 23-34 (Loeb).

(49) Tyrta, fr. 11, 35-38, cf. 1, 12-13 (Loeb).

(50) Paus. 4, 15, 7-8.

(51) Str. 8, 4, 10, C 362; Paus. 4, 15, 7.

(52) 一〇は前二世紀のフテナイの文法学者 Apollodoros に由来する Strabon の「エリス人」を「ピュロス人」に改める
 問題で Jacoby, *FGH IIB* 244. Apollodoros von Athen F334; Kiechle, *Mes. St.*, p. 27 は改訂に賛成しているが、
 Huxley, p. 57, 129, n. 369 はこれを反證を加えている。あつてはエリスをスパルタの同盟者とみる問題で Ehren-
 berg, p. 37 はその立場であるが Forrest, p. 69-70 は決定を留保し Huxley, p. 57 及び Strabon, *Pausanias* の伝える
 べきエリスをメッサニア側に立たせよう。

(53) Paus. 4, 15, 7-16, 7.

(54) Paus. 4, 17, 10-24, 4.

(55) Paus. 4, 17, 11, cf. Huxley, p. 91.

- (56) Paus. 4, 6, 2.
- (57) Wade-Gery, p. 289, c. n. 1.
- (58) Wade-Gery, p. 289-302.
- (59) Paus. 4, 15, 2.
- (60) 例えは Forrest, p. 21 によると、それぞれの在位年代は、前六二五—六〇〇年ごろと前四九一—四六九年である。
- (61) 例えは Jacoby, FGH IIIA 265. Rhanos von Bene F42-46 Aus den Messeniaka に、Anaxilas の名は見出されな。
- (62) Paus. 4, 24, 1.
- (63) Paus. 4, 24, 1; 3.
- (64) Paus. 8, 39, 3-5.
- (65) Hdt. 1, 65-68.
- (66) Plout, Mor. 292B, cf. 277B-C.
- (67) 例えは Huxley, p. 57-58 で、この戦いを第二次メッセニア戦争中のこととしている。
- (68) Huxley, p. 137, n. 477, cf. Kiechle, Mes. St., p. 18 も同意見である。
- (69) 註(34)に、第二次メッセニア戦争とは別に、前六〇〇年ごろメッセニア人がスパルタと戦って敗れたことを認めている者として、Huxley, Wade-Gery と新村氏を挙げたが、Huxley と Wade-Gery の説はすでに本文において否定された。他方、新村氏は、主として、この二人の説のほかに、第二次メッセニア戦争を前七世紀末に置く Kiechle の説に依っているように思われる。しかし第一節で論じたように、Kiechle の説も成立しない。したがって、結局、第二次メッセニア戦争と呼ぶにせよ呼ばないにせよ、前六〇〇年ごろには、言うに値するようなスパルタ、メッセニア間の戦いはなかったことが、本稿において明らかにされたと言えることができる。
- (70) Forrest, p. 69.
- (71) Plat., Nomoi 698 D-E.
- (72) Hdt. 6, 106, 3.
- (73) 例えは Huxley, p. 88, 94; Kiechle, Mes. St., p. 106-109, 113-115 で、Platon の伝えるメッセニア戦争を事実と認めよう。

- (74) Paus. 4, 24, 3.
- (75) Wade-Gery, p. 292.
- (76) ただしこの系図を利用してヒラの戦いを前六〇〇年頃に置くことも、同様に困難である。 Cf. Wade-Gery, p. 292.
- (77) E.g. Huxley, p. 92.
- (78) Wade-Gery, p. 294-295.
- (79) Hdt. 1, 65, 1.
- (80) Paus. 3, 3, 5.
- (81) Hdt. 1, 65-67, 1. ただしこの点にかんして、例え⁴⁴ Forrest, p. 73, cf. Huxley, p. 65-66, 新村⁴⁵ 二二頁は、スパルタの対テゲア戦の失敗は Leon 以来と考えてゐるやうである。
- (82) Hdt. 7, 204; Paus. 3, 3, 4-5. ただし Herodotos は Eurykrates II を Eurykratidas としつゝゐる。
- (83) 拙稿『第一次メッセニア戦争期のスパルタ』三九一四〇頁。
- (84) Huxley, p. 65; Forrest, p. 73; 新村⁴⁶ 二八頁。
- (85) Hdt. 1, 67, 1; Paus. 3, 3, 5.
- (86) Hdt. 1, 53; 65, 1; 68, 6-82, 1; 83-84.
- (87) Huxley, p. 66; 新村⁴⁷ 二二頁。 Cf. Huxley, p. 68; Forrest, p. 74; 新村⁴⁸ 二八頁。
- (88) Hdt. 1, 68, 1; Paus. 3, 3, 5.
- (89) Jacoby, FGH IIB 115. Theopompus von Chios F69 (Diog. Laert. 1, 115), cf. Diog. Laert. 1, 114. Cf. Huxley, p. 66-67; Kirk-Raven, p. 44-45; Forrest, p. 75.
- (90) Huxley, p. 68; Forrest, p. 79. ⁴⁹ 註(89)を参照。
- (91) Huxley, p. 67; Forrest, p. 74.
- (92) Hdt. 1, 68, 6.
- (93) Diog. Laert. 1, 68 ⁵⁰ 前五六〇年なつて前五五六年。
- (94) Jacoby, FGH IIA 105. Papyrus-Fragmente aus der Griechischen Geschichte F1 P. Ryland 18; IIC, 1963, p. 336. ただし Hippias と Peisistratos についてこの報告は誤りである。

- (95) Plout., Mor. 859 C-D.
- (96) Huxley, p. 71, 75-76, cf. Forrest, p. 79-80.
- (97) Hdt. 3, 44, 1; 46-47; 54-56.
- (98) Hdt. 5, 62, 2-65, 2; Thouk. 6, 53, 3; 59, 4; Arist., Ath. Pol. 19, 4-6.
- (99) Hdt. 7, 235, 2.
- (100) Hdt. 1, 82, 2.
- (101) Huxley, p. 70.
- (102) Hdt. 1, 82-83.
- (103) Huxley, p. 70; Forrest, p. 79 は「チェレニア獲得後と考えているが、Hdt. 1, 82, 1-3 の叙述は、獲得前とみる可能性をも許すように思われる。」
- (104) Huxley, p. 67 は「スパルタがクノッソスと戦争し、Epimenides を捕えて処刑したとの Paus. 2, 21, 3 の伝承を用い、その可能性もくはないとしているが、同じ Paus. 3, 12, 11 は「スパルタ人はクノッソスと戦ったことはない」と述べている」と伝えているから、Huxley 自身認めているように「確かなことは言えないとするのが妥当である。」

(一九七三・一一・二四)

(本稿は昭和四七年度文部省科学研究費の補助による研究の一部である)